

〔書評〕 戦後史の空白を埋める「癒合」という視座

—日高勝之編『1970年代文化論』—

花田史彦

一 はじめに

『ヒポクラテスたち』という映画がある。昨年亡くなった映画監督・大森一樹（一九五二—二〇二二年）の代表作で、京都の医科大学に通う学生たちの群像劇だ。一九八〇年に公開された作品で、医大生だった大森の自伝的な要素も組み込まれているらしいから、舞台は一九七〇年代だろう。古尾谷雅人演じる主人公・荻野愛作の、学生運動家にもノンポリにもなりきれない、ぼんやりした姿が不思議な魅力を放つ名作である。観るたび、七〇年代とは何なのだろうかと思える。

これは、必ずしも個人的な雑観ではなかったらしい。

本稿で取り上げる、日高勝之編『1970年代文化論』（青弓社、二〇二二年。以下、本書）は、「七〇年代は、前後の時代と比べて、何かぼやけたイメージがないだろうか」（二三頁）と問う。そして、そんなシンプルな問いかけから出発して、「ぼやけた」時代の具体像を浮き彫りにし、その歴史的意義を教えてくれる。

二 本書の内容

本書の章立ては次のとおりである。ここでは各章の内容について、順を追って簡単にまとめていく（括弧内は執筆者名）。

序章 みえにくい一九七〇年代（日高勝之）

第一部 家族・若者・中高年

第一章 「からかい」からみる女性運動と社会運動、若者文化の七〇年代―雑誌「ビックリハウス」におけるウーマン・リブ／フェミニズム言説を通じて（富永京子）

第二章 家族とテレビドラマの一九七〇年代―「ホームドラマ」から「反ホームドラマ」への転換とその背景（米倉律）

第三章 「司馬史観」への共感とポスト「明治百年」―「教養主義の没落」後の中年教養文化（福岡良明）

第二部 政治・性・マイノリティ

第四章 大島渚と蓮實重彦―反時代・フランス・マゾヒズム（日高勝之）

第五章 太田章―ポスト新左翼の「革命」とアイヌ民族運動の胎動（藤巻光浩）

第六章 東郷健―マイノリティ・ポリティクスと

アートの不都合な関係（長崎励朗）

第三部 国家・地方とメディア

第七章 テレビが媒介するナショナルな時空間の編成―NHK『新日本紀行』を中心に（米倉律）

第八章 四畳半テレビ―CATVとビデオ・アクトが夢見た「コミュニティメディア」（飯田豊）

終章 「癒合」の時代―一九七〇年代のリアルと現代性（日高勝之）

序章では、編者の日高勝之が本書を貫く問題意識を述べる。それは、「政治の季節」とされる一九六〇年代と「バブルの時代」とされる一九八〇年代とのさまざまな一九七〇年代史を埋めるということだ。

六〇年代も八〇年代も研究の蓄積が分厚いが、七〇年代は見落とされがちだった。仮に取り上げられたとしても、あくまでも過渡期としての消極的な位置づけ、「夢の時代」「虚構の時代」「自己の時代」といった大

掴みな把握、あるいは当時の若者に限定された分析にとどまっていた。

しかし、当然ながら一九七〇年代と一口に言っても多様な世代、政治、空間が混在していた。そのありようを、あくまでも具体的に解明する必要がある。そのような歴史研究の正攻法を以て、本書は展開する。

第一章「からかい」からみる女性運動と社会運動
若者文化の七〇年代」では、七〇年代の若者文化を象徴する雑誌『ビックリハウス』を素材として、そこで女性運動がいかに関与していたかを検討している。

女性運動は、七〇年代にはそのラディカルさゆえに反発を招いたが、八〇年代に入ると穏健化し「正論」として社会に受け入れられた（ウーマン・リブからフェミニズムへの移行）という見方がある。

しかし、本章によれば、事態はもう少し複雑だ。『ビックリハウス』の誌面から見えてくるのは、女性運動に対する「からかい」や揶揄である。

そういった言葉は相手が「女性だから」投げつけら

れたというよりも、「社会運動がもつ闘争的要素」自体が問題とされたのだと本章は指摘し、「若者たちが社会運動を揶揄する理由は、社会運動の「価値観の押し付け」「正義の押し売り」にこそある」と述べる（五二―五三頁）。そして、ここに、男女平等や個人主義を重んじるという意味での「戦後民主主義」の浸透が見てとれるという。

第二章「家族とテレビドラマの一九七〇年代」では、当時の「ホームドラマ」と「反ホームドラマ」が俎上に載せられる。

従来、ホームドラマの時代は、反ホームドラマの台頭によって終わったと言われてきた。しかし、家族を描いたドラマ自体は現在も消滅していない。その事実から、本章は反ホームドラマの位置づけを再考する。

本章は、山田太一や橋田壽賀子の作品を取り上げながら、反ホームドラマの特徴を「家族という関係を、いつ壊れてもおかしくない危うく脆弱な「入れ物」として描いたこと」（七〇頁）とする。

ただし、危うさや脆弱さは家族の崩壊に直結しない。反ホームドラマは、最終的に家族の再生を描いた。それはむしろ、戦後の核家族の定着を意味した。さらに、反ホームドラマは核家族の枠から抜け出そうとする女性の姿を描くことによって、性別役割分担や血縁を前提としない、多様なポスト戦後家族のありかたも展望すらしていたのである。

第三章「司馬史観」への共感とポスト「明治百年」では、司馬遼太郎作品の受容から教養主義が「没落した」と言われる時代の教養のありかたを考察している。七〇年代、司馬の歴史小説はたつづけに文庫化・テレビドラマ化され、人気を博した。

司馬作品の特徴は、たびたび挿入される「余談」である。それによって、読者（主に男性サラリーマン）は「ストーリーの躍動感だけではなく、戦国武将の類型やその背景に思いをめぐらせる知的な楽しみを味わうことができた」（九〇頁）という。そうした読書実践は、単なる娯楽というよりも、教養主義的なものであ

った。

さらに、司馬作品の受容は多様化していく。斎藤道三や坂本竜馬ら主人公たちは、旧来の価値観にとらわれない革新的な行動をする。そうした人物像は、新自由主義とも相性が良かったし、同時に日本人としての自信をもたらすものでもあった。

この事実からは、欧米を規範とする「ギャッチアップ型近代」の終焉も読み取ることができるといえる。

第四章「大島渚と蓮實重彦」では、七〇年代にカリスマ的な人気を集めた同世代の映画作家と評論家とを同時に扱う。

一見すると似ても似つかぬ両者だが、「反時代、反政治、反制度」「フランス」「(ドゥルーズ的)マゾヒズム」という共通項が見出せるという。

大島と蓮實、いずれも三島由紀夫割腹事件や連合赤軍事件を契機として、七〇年代には眼前の社会から背を向けた活動を行なっていく。それは、アメリカ化する戦後日本に対し、「フランス」という知のオルタナテ

イブを創作や学問をとおして突きつけるかたちで現れた。たとえば、蓮實が翻訳したドウルーズの『マゾックとサド』にしても、大島の『愛のコリーダ』にしても、マゾヒズムがテーマとなっている。主客の攪乱や意味の宙吊りを重んじる立場へと、両者は至った。

こうして、大島と蓮實は、「映画界における大衆性とは別の、知的な方向性の潮流（二二七頁）に道をつけ、八〇年代社会とも馴染んでいくことになる。

第五章「太田竜」では、政治活動家・太田竜によるアイヌとの共闘・決裂が描かれる。

旧樺太出身の太田は、新左翼の運動に身を投じたのち距離を置き、やがて幼いころから身近な存在だったアイヌを抑圧してきた近代社会そのもの（新左翼も含む）への批判に至る。その結果が、たとえば七二年にアイヌ解放同盟の結城庄司とともに行なった、日本人類学会批判の声明であった。

ポストコロニアル理論が日本に持ち込まれる以前に行なわれたこの実践は、画期的であった。また、これ

までの研究では見過ごされてきたが、日本人とアイヌとが共闘した事実も重要なものだった。

もつとも、この共闘は長くはつづかない。実力行使を厭わない太田の暴走は、独善に陥っていく。

最終的に太田はアイヌと袂を分かち、オカルト陰謀論者となって迷走を深めていく。しかしその存在は「反作用を生み出した奇妙な触媒」（二六二頁）であり、アイヌ自身の手による民族運動を促したのである。

第六章「東郷健」では、「伝説のおかま」を自認した政治活動家・東郷健に焦点が当たる。

東郷を、同じく同性愛者で天井桟敷の団員だった美輪明宏と比較しながら、「東郷のように政治的主張を掲げるセクシユアル・マイノリティはあくまで「色モノ」としてみられてしまう。現代まで続く「ゲイは芸術的センスがある」という一見肯定的なステレオタイプは、こうした力学の裏返しではないだろうか」（二八二頁）と本章は問いかける。

七七年、東郷は雑民の会を結成。それは雑民党の母

体となり、さまざまな困難を抱えた候補者が立った。

同党から当選者は出せなかったが、東郷はNHKによる勝手な政見放送の音声削除を批判、さらに政見放送に手話通訳を導入させ、一定の政治的役割を果たした。

だが、マイノリティの当事者性が政治の議題となることは、いまなお少ない。そうさせているのは、たとえば先述のステレオタイプのような、マジョリテイの欲望なのだと言っ。

第七章「テレビが媒介するナショナルな時空間の編成」では、NHKの『新日本紀行』（六三―八二年）が取り上げられる。とくに焦点が当たるのは、ドキュメンタリー色の強い第二期（六九―七七年）だ。

第一期の段階では「地方」を「遅れた」「前近代的」なものとして映し、高度成長による変化を肯定的に描いていた同番組だが、第二期になると、そうした「近代主義」は薄れ、「番組は、各地方を、固有の地理と歴史、そして精神風土をもつ「故郷」として措定し、そのような「想像の共同体」的な「故郷」の「いま・こ

こ」を全国の視聴者に伝えていった」（二二〇頁）。

これは単なる懐古やロマン主義ではない。過去・現在・未来をすべて肯定する話法である。背景には「地方の時代」と呼ばれた七〇年代特有の状況があった。

また、「地方」が精密に描かれることは、その集合体としての「ネーション」を浮かび上がらせる。だから『新日本紀行』は、テレビのナショナル・メディア化も象徴していたのである。

第八章「四畳半テレビ」では、七〇年代のケーブルテレビに固有の特質が明らかにされる。対象となるのは、静岡県下田市の下田有線テレビ放送や岡山県津山市の津山放送などのローカル局である。

五〇年代の共同視聴施設から始まったケーブルテレビは、七〇年代には町議会中継や災害報道からバラエティまで多岐にわたる自主放送を行なうようになった。そんななか、各地のケーブルテレビは、テレビの民主化や市民参加という理念を打ち出していく。局のなかの有志によるネットワークもつくられた。背景には、

「政治の季節」に運動と関わった人々の、都市から地方への移動があつた。そこに、既存のマスメディアとは異なる文化のありかたを模索していた、世界的なビデオ・アートの流れも加わる。

こうして、七〇年代ならではのローカルかつグローバルなケーブルテレビのありかたが立ち現れたのである。それは「現在とは異なる可能態」（二二九頁）と言えるものであり、いまなお参照点たり得るといふ。

終章では、各章の議論を振り返り、七〇年代とは何だったのかという問いへの答えが次のように示される。

一九七〇年代には、「個」と「自由」が暗黙の結節点となることで、六〇年代的な〈政治の季節〉の残滓と教訓、戦後民主主義的価値観、ポストモダン思想、新自由主義的なレトリックなどが溶け合つていった。「個」と「自由」を結節点とするため、それらと親和性が高い大衆消費主義もスムーズに糾合し、浸透させていった。七〇年代は、そうし

た過程を通して、かなえられなかった理想や、本来なら差異がある多様な問題系が結果的に結びつくことで癒えていったかのようにみることができ、時代ではないだろうか。だからこそ、「癒合」の時代という形容がふさわしいと思われる。（二六七―二六八頁）

つまり、単線的な交代劇というよりも、いくつもの雑多なアクターが絡み合う動的なプロセスとして歴史を捉えるべきなのではないか、ということである。

また、我々が生きている二〇二〇年代は、「癒合」の矛盾があらわになりつつある時代だという展望も示され、本書は締め括られる。

三 総評

七〇年代の重要性自体は、これまでも指摘されてきた。たとえば、戦後史が専門の歴史学者・戸邊秀明

は、五〇年代と七〇年代とを「戦後史像の再審に重要な役割を果たし」得る「双生児のような」関係だと述べたうえで、次のように危惧を表明していた。

通史においてもおよそ七〇年代の叙述は政治過程、経済史、世相史の寄せ集めにすぎず、「七〇年代史」という像すらまとも存在しない。対抗運動における「六八年」から市民主義的抵抗へという語り方は、左翼の自壊と幻滅によって沈黙させられ、否認された歴史をよく捉えられない。こうして五〇年代と七〇年代の否認された歴史をさらに否認するように、一方では映画「三丁目の夕日」に典型的に見られるような「昭和三〇年代」ブームが、他方では「六八年」の世界性や可能性が、ノスタルジアもまじえて過剰に語られ、消費されている。

(一)

この戸邊の危惧を踏まえて、まず素直に七〇年代を対

象とした共同研究の結実を喜びたい。「癒え」の時代という捉え方がどこまで妥当なのか、あるいはそれが七〇年代に固有な特質と言えるのか、他の時代にも当てはまることなのか、といった検討はこれからなされるべきだろうが、いずれにしても本書によって「七〇年代史」のひとつの像が結ばれることになった。これは大きな達成であろう。

さて、そのうえで、「いまだ尽きせぬ発見の宝庫」(二七三頁)としての七〇年代から、評者なりの「発掘」を少し行なってみたい。

我田引水で恐縮だが、筆者が研究対象としている佐藤忠男(一九三〇—二〇二二年)の名著『長谷川伸論』(中央公論社、一九七五年)も七〇年代の作品である。「股旅もの」というジャンルをつくった作家・長谷川伸について論じながら、日本の庶民道徳史へと到達する壮大な論考だが、このなかで佐藤は、次のように述べている。

私の世間に認められた最初の論文は、いまから二十年前に雑誌『思想の科学』に投稿した「仁侠について」(一九五四年)という短いエッセイだった。これでは直接には長谷川伸を論じたわけではなかったが、この未熟なエッセイをいざ本格的な論文に発展させなければと思ひ、そのとき中心的な素材となるのは長谷川伸の文学であろうと考えつづけてきた。(1)

佐藤にとって『長谷川伸論』は、五〇年代に始めた自らの仕事に決着をつけるものだったのだ。

『長谷川伸論』だけではない。七〇年代、歴史研究それ自体における多くの画期的な成果が出た。日本近代史に限ってみても、坂野潤治『明治憲法体制の確立』(東京大学出版会、一九七一年)、松尾尊兌『大正デモクラシー』(岩波書店、一九七四年)、三谷太一郎『大正デモクラシー論』(中央公論社、一九七四年)、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』(青木書店、一九七四

年)、ひろたまさき『福沢諭吉研究』(東京大学出版会、一九七六年)などを挙げることもできる。(2)

いずれの研究者も一九三〇年前後に生まれ、少年時代に日本の敗戦を迎えた戦後派世代にあたる。かれらは、さまざまに可能性に満ちた五〇年代に学問と触れ、学界や論壇でデビューし、七〇年代に円熟期を迎えた。歴史認識をめぐる問題が、本書(とくに第二、四、五、七章)において重要な位置を占めていたことを踏まえれば、たとえば史学(思想)史はひとつの有力な補助線になると思われる。

四 おわりに

以上、評者なりに本書の意義を示し、またささやかな補足を行なった。大方のご叱正を仰ぎたい。

ひとつの「時代」を、大胆かつきめ細やかに捉えた本書の試みは、今後、関連分野の道しるべとなるだろう。七〇年代史のさらなる発展を祈りたい。

※本稿は、科学研究費基盤研究（C）「メディア論の精神史研究：映画批評家としての戦後知識人群像」（研究課題 21K00154）の成果の一部である。

- (一) 戸邊秀明「戦後思想としての『戦後』史叙述―一九五〇年代を焦点として」『メトロポリタン史学』第一号、二〇一五年二月、二二頁。
- (二) 佐藤忠男『長谷川伸論』中央公論社、一九七五年、三三五―三三六頁。
- (三) 史学（思想）史については、高木博志「近現代史のなかの映画『祇園祭』―もう一つの明治百年―」谷川建司編『映画産業史の転換点―経営・継承・メディア戦略』（森話社、二〇一〇年）、福冢泰洋「松尾尊光と大正デモクラシー研究」『人文学報』第一一七号、二〇一二年五月、同「三谷幸太郎と『大正デモクラシー論―吉野作造の時代とその後』」『日本史研究』第七〇八号、二〇一二年八月、前田亮介「制度」と「友敵」―坂野潤治『明治憲法体制の確立』の歴史叙述」『日本史研究』第七〇八号、二〇一二年八月を参照。